様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２８０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０２１６

研究課題名（和文）訪問看護師に必要なフィジカルアセスメント能力－看護基礎教育で求められる教育内容

研究課題名（英文）A study of basic nursing education based on the physical assessment skills required of home-visiting nurses

研究代表者
横山　美樹（Yokoyama, Miki）

東京医療保健大学・医療保健学部・教授

研究者番号：７０２３０６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：訪問看護師に求められるフィジカルアセスメント能力とそれに基づいた看護基礎教育内容を明らかにする目的で、熟練訪問看護師13名に半構造化インタビューを行い質的記述的方法により分析した。その結果、求められるフィジカルアセスメント能力として【フィジカルイグザミネーションを正確に実施し臨床推論で対象の緊急性を判断する力】【対象者の生活状況をアセスメントし異常に気付く力】【聞く力、発信力等のコミュニケーションの力】等、必要な看護基礎教育内容として【アセスメント結果から看護診断し、今後の生活につなげた看護介入をイメージできる教育】【療養者の生活を自分のこととして理解できる教育】等があげられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　包括医療システムの推進に伴い、医療の場は病院等の施設から在宅へと広がっている中、在宅で過ごす療養者を支援する訪問看護師の役割は非常に重要である。訪問看護師は基本１人で訪問することから、療養者の健康状態を正確にアセスメントし、緊急性の有無を見極め必要な援助の提供、必要時の適切な報告・連絡が求められている。本研究は、熟練訪問看護師の語りから、実際どのようなフィジカルアセスメント能力、臨床判断力が求められるのかを明らかにし、またそれに伴って看護基礎教育で求められる教育内容を明らかにした研究であり、本研究結果が看護基礎教育、特に基礎看護学、在宅看護学療育で必要な教育内容として参考になると考える。

研究成果の概要（英文）：Objectives: This study aims to identify the physical assessment skills required of home-visiting nurses, as well as the educational content necessary for basic nursing education based on these skills.
Method: Semi-structured interviews were conducted with 13 experienced home-visiting nurses. The obtained data were analyzed using the qualitative descriptive method.
Results: The required physical assessment skills include [the ability to accurately conduct physical examination and use clinical reasoning to determine the patients' condition and urgency] and [the ability to assess patient' living conditions and identify any abnormalities] and [the ability of the communication]. Necessary educational content includes [curricula that enables students to make nursing diagnoses based on the assessments and visualize nursing interventions to help patients with their future lives]and [the ability to understand the lives of convalescents as their own].

研究分野：基礎看護学

キーワード：訪問看護師　フィジカルアセスメント能力　臨床判断能力　看護基礎教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

　地域包括ケアシステムの推進のもと、在宅療養者の生活を支える訪問看護師の役割が拡大している中、訪問看護師に求められる力、特に対象者の身体状態を的確に判断できるフィジカルアセスメント能力とその能力に必要な看護基礎教育内容が明らかになっていない現状があった。

２．研究の目的

１）全国の訪問看護師のフィジカルアセスメントの実施状況と看護師経験年数、訪問看護師経験年数との関連を明らかにすること。

２）訪問看護師に必要なフィジカルアセスメント能力を明らかにし、新卒でも訪問看護師に必要な基礎知識、技術を獲得するための、看護基礎教育におけるフィジカルアセスメントを中心とした教育内容を検討すること。

３．研究の方法

１）研究目的１）に対して、下記の方法で実態調査を実施した。

・対象者：全国訪問看護事業協会のリストから無作為に抽出した 900 施設、1 施設 2 名の訪問看護師

・調査方法：対象施設の施設長に対して、本研究の目的、方法を説明した研究協力の依頼文書と調査用紙を同封して郵送。施設長の同意を得られた場合、施設長に対象者 2 名の選定、研究協力依頼書、調査用紙、切手を貼った返信用封筒 1 セットの配付を依頼した。対象者からの返信をもって同意を得たこととした。

・調査内容：①対象者の背景：性別、年齢、看護師としての臨床経験年数、訪問看護師としての経験年数等、最終専門教育課程、フィジカルアセスメントに関する学習経験

②現在の訪問看護の状況：対象者の概要（選択式）

③訪問看護時に行っているフィジカルアセスメント内容（選択式）

④フィジカルアセスメントに関する教育ニーズ：教えてほしいフィジカルイグザミネーション技術（選択式）

＊選択式はすべてリッカート４件法を実施した。

・分析方法：①対象者の属性・フィジカルアセスメント実施頻度の各項目：記述統計量を算出した。

②看護師経験年数とフィジカルアセスメント実施頻度、　訪問看護師経験年数とフィジカルアセスメント実施頻度：２変数の相関を見るために Spearman の順位相関係数を実施した。

＊相関分析を実施するにあたり、Shapiro-Wilk 検定を行い、正規分布に従わないことを確認。IBM（international Business Machines Corporation）　SPSS Statistics27 を用いて分析した。

・研究期間：2019 年 10 月～2021 年 3 月

２）研究目的２）に対して、下記のインタビュー調査を行った。

・対象者：訪問看護経験 5 年以上で対象者に対するアセスメント能力が高いと管理者より推薦された訪問看護師 13 名

・研究方法：半構造化インタビューを行い、質的記述的分析法を参考に分析を行った。

　インタビューの焦点になった内容は、①訪問看護において、対象者のフィジカルアセスメントを行う上で気を付けていること、心がけていることは何か、②対象者のフィジカルアセスメントを行う上で自分なりの手順はあるのか、その具体的内容や判断基準、③訪問看護師に求められるフィジカルアセスメント能力とは何か、④その力を得るために看護基礎教育で押さえるべき教育内容は何と考えるか、である。なお、本研究では「フィジカルアセスメント能力」を「対象の身体状態に関する情報を適切な方法で収集し、専門知識をもとに解釈･分析して、対象の身体状態が正常であるのか、問題はないかを判断する力」として用い、対象者にも説明の上インタビューを実施した。

分析に際しては、4 名の研究者間で討議を重ね、確実性、適用性、確証性を確保した。

・研究期間：2022 年 1 月～2022 年 10 月

※上記両研究に際して、主研究者が所属する大学の研究倫理審査による承認を得て実施した。

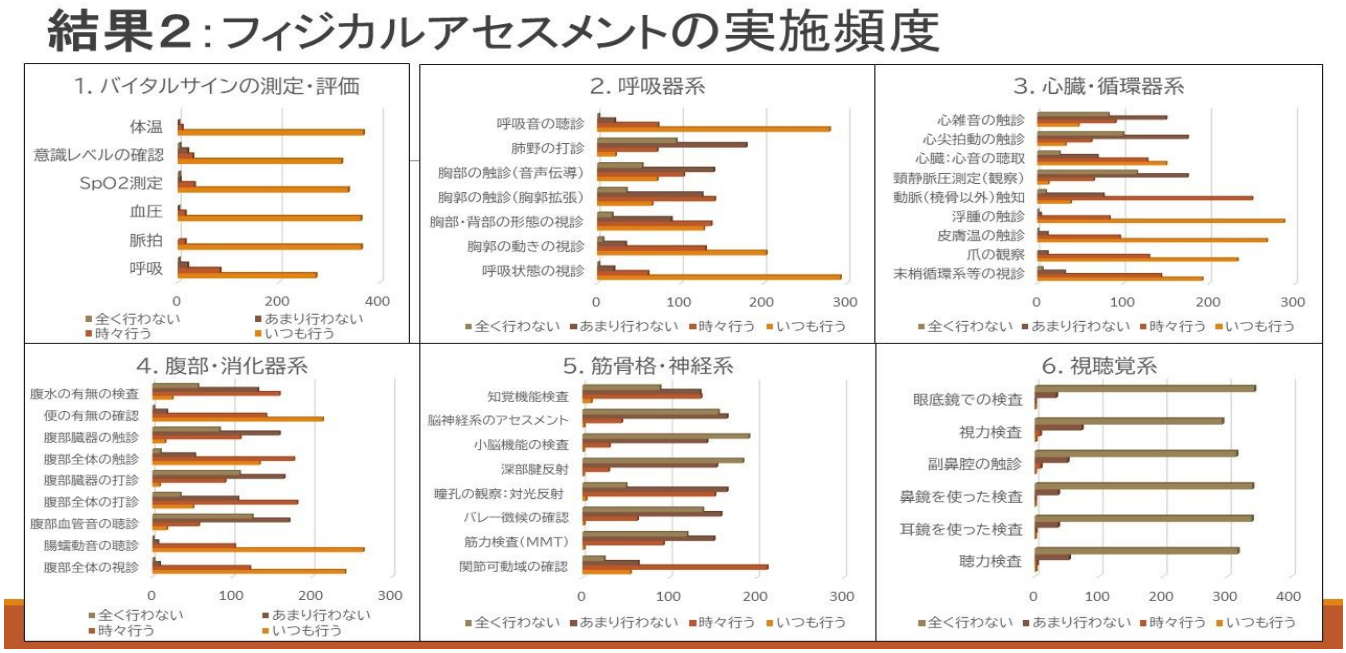
４．研究成果

１）研究目的１）

①対象者の背景：378 名から返送があり、返送された調査用紙の内容を入力し、データ分析を行った。 対象の属性は、女性 354 名（93.6%）、男性 23 名（6.1%）とほぼ女性であり、最終卒業教育課程は、専門学校 247 名（79.2%）、短大 22 名 （7.0%）、4 年制大学 30 名（10.6%）、修士課程 10 名(3.2%）と専門学校卒業がほとんどであった。

訪問看護師の経験年数は 1 年～30 年以上と幅広かった。訪問 看護師経験年数と看護基礎教育課程でフィジカルアセスメント教育を受けているかどうかについては、看護基礎教育卒後 10 年以内の看護師は看護基礎教育でフィジカルアセスメント教育を受けていたが、それ以上の経験年数の訪問看護師は、看護基礎教育課程での系統的な教育は受けておらず、個人で講習会等に参加する などしてフィジカルアセスメントに関する教育を受けていた。フィジカルアセスメントに関する教育ニーズについては個人差が大きい傾向がみられた。

②訪問看護師が実施しているフィジカルアセスメントの実態(どのようなフィジカルアセスメント内容を訪問看 護時に実施しているのか）は、下記図のとおりである。



バイタルサインの観察、測定（体温、呼吸、循環）は、いつも行う割合がほぼ 90%以上であった。呼吸器系では、呼吸状態の観察、呼吸音の聴診が 90%以上でいつも行われていたが、触診、打診の実施頻度は低かった。心臓循環系では、浮腫の触診、皮膚温の触診、爪の観察の実施頻度が高かったが、心音の聴診、頸静脈圧測定の実施頻度は低かった。腹部消化器系では、便の有無の確認、腸蠕動音の投信、腹部全体の視診の実施頻度が高かった。筋骨格・神経系では、関節可動域の確認の実施頻度は高かったが、その他の脳神経系のアセスメントの実施頻度は低かった。その他、顔面の観察、口腔内の観察の実施頻度が高く、また直腸・肛門の観察も「時々行う」頻度は高かった。

全 56 項目と看護師経験年数との相関を求めたが、いずれの項目も相関係数 $r \leqq 0.2$ でありほとんど相関はなかった（$p > 0.05$）。

訪問看護師経験年数とフィジカルアセスメント実施頻度との相関係数を求めた結果は、全 56 項目中 13 項目（胸郭の動きの視診、胸部・背部の形態の視診、胸郭拡張の触診、音声伝導の触診、皮膚温の触診、浮腫の触診、心音の聴診、腹部の血管音の聴診、肝臓等腹部臓器の触診、腹水の有無の検査、上肢下肢の ROM の確認、頸部リンパ節触診、乳房の視診）が相関係数 $r = 0.2 \sim 0.4$ であり、正の相関がみられた（$p < 0.05$）

以上より、看護師経験とフィジカルアセスメント実施頻度には相関関係が認められなかったにもかかわらず、訪問看護師経験とフィジカルアセスメント実施頻度に相関があったのは、医療機器・検査機器が限られている中で、単独で患者の身体状態を的確にアセスメントする必要がある訪問看護師にはフィジカルアセスメントがより重要であるから、だと考える。そのため、看護基礎教育課程で、特に訪問看護師に必要なフィジカルアセスメント技術を教育することにより、訪問看護師のフィジカルアセスメントがより広がる可能性があるのではないかと考えた。

２）研究目的２）に対して

・対象者の概要：13 名の訪問看護平均年数は 8.7 年（SD=4.6)、女性 9 名、男性 4 名であった。看護基礎教育でフィジカルアセスメント教育を受けていない対象者も、全員卒後教育でフィジカルアセスメントに関する教育、学習経験をもっていた。

熟練訪問看護師 13 名に対するインタビューの分析から下記の結果を得た。

① 訪問看護で気を付けていることとして【事前に対象者の状態を把握し、チームで情報共有することに努める】【身体のみでなく生活に関する情報収集を意識する】【対象の状態を多角的にとらえ、対象に起こりうる症状を予測する】【病院と違い対象者の自宅にお邪魔するという意識を忘れない】の 4 カテゴリが抽出された。
② 訪問時のフィジカルアセスメントの実際として【まず顔色や表情、全体像で変わりないか確認する】【バイタルサインの確認後全身をみていく】【生命の危機を予測しながら全身をチェックする】【系統別に焦点をあててアセスメントする】【身体に触れながら看護の視点でアセスメントする】【生活につなげたアセスメントをする】の 6 カテゴリが抽出された。
③ 訪問看護師に求められるフィジカルアセスメント能力として【フィジカルイグザミネーションを正確に実施し、対象の状態、異常、緊急性を判断する力】【対象者の生活状況をアセスメントし異常に気付く力】【緊急の対処が必要なのかの判断力と今後の予測に関するアセスメント能力】【聞く力、アセスメント結果を対象者・医師・同僚・多職種に正しく説明し伝える発信力】【適切なアセスメントにつなげるために対象者・家族との信頼関係を築く力】の 5 カテゴリが抽出された。
④ 看護基礎教育で必要な教育内容として【バイタルサイン、フィジカルアセスメントを正しく行い、正常・異常の判断ができるための教育】【アセスメント結果から看護診断し、今後の生活をみすえた看護介入をイメージできる教育】【療養者の生活を自分のこととして理解できる教育】【組織の中で働くための基本的知識】【多職種理解につながる教育】の 5 カテゴリが抽出された。

以上より、研究目的１）２）両者の結果からも先行研究と同様、対象者のバイタルサインの確認は必須の技術であるといえる。一人で訪問する訪問看護師にとって、次の訪問まで対象者が自宅での生活を続けることができるかどうかの判断が重要であり、この判断のためにも、バイタルサインを基本とする「フィジカルアセスメント」の力が不可欠であり、そのためにも看護基礎教育課程で卒業までに学生が身に着けられるような教育内容が望まれる。

また研究２）より、フィジカルイグザミネーション技術には様々な項目が含まれるが、訪問看護師は「生活につなげたアセスメント」をすることが求められ、そのためにも対象者の「いつもの状態を把握」し、「いつもと違う」異常に気が付く重要性があげられ、単なる身体状態のアセスメントではなく「生活につなげる」看護ならではの視点の重要性が改めて示された。また看護におけるコミュニケーション能力の重要性はすでに言われているが、特に「対象者、家族、医師やチームメンバーへの発信力」の大切さも示され、訪問看護師にとってアセスメント結果の発信までが求められるフィジカルアセスメント能力だと考える。

すでに病院での看護師経験がないまま、卒後すぐに訪問看護師として働く看護師が増えている現状において、看護基礎教育においてフィジカルアセスメントや対象者の生活についての理解を深める教育、コミュニケーションについての教育の充実が求められると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横山美樹、西村礼子、菱田一恵、野崎真奈美
２．発表標題 訪問看護師に求められるフィジカルアセスメント能力、臨床判断能力に基づく看護基礎教育の検討
３．学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 横山美樹、西村礼子、野崎真奈美、菱田一恵
２．発表標題 全国の訪問看護師のフィジカルアセスメント実施頻度と看護師経験との相関
３．学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	野崎　真奈美 (Nozaki Manami) (70276658)	順天堂大学・医療看護学部・教授 (32620)	
研究分担者	菱田　一恵 (Hishida Kazue) (00326117)	順天堂大学・医療看護学部・助教 (32620)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	西村　礼子 (Nishimura Ayako) (10757751)	東京医療保健大学・医療保健学部・准教授 (32809)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関